

《梦十夜》之第五夜 PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/146/2021_2022__E3_80_8A_E6_A2_A6_E5_8D_81_E5_c105_146176.htm こんなをた。何でもよほど古い事で、神代(かみよ)に近い昔と思われるが、自分が(いくさ)をしてく北(まけ)たために、生擒(いけどり)になって、の大將の前に引き据(す)えられた。その人はみんな背が高かった。そうして、みんない髯を生(は)やしていた。革のを(し)めて、それへ棒のような(つるぎ)をるしていた。弓は藤蔓(ふじづる)の太いのをそのまま用いたようにえた。漆(うるし)もってなければ磨(みが)きもかけてない。(きわ)めて素(そぼく)なものであった。の大將は、弓の真中を右の手で握って、その弓を草の上へ突いて、酒(さかがめ)を伏せたようなものの上に腰をかけていた。そのをると、鼻の上で、左右の眉(まゆ)が太く接(つな)がっている。その剃(かみそり)と云うものはなかった。自分は(とりこ)だから、腰をかけるに行かない。草の上に胡坐(あぐら)をかいていた。足には大きな藁沓(わらぐつ)を穿(は)いていた。この代の藁沓は深いものであった。立つと膝(ひざ)がしらまで来た。その端(はし)の所は藁(わら)を少し残(あみ)のこして、房のように下げて、くとばらばらくようにして、りとしていた。大將は篝火(かがりび)で自分のをて、死ぬか生きるかといた。これはそのので、捕(とりこ)にはだれでも一はこういたものである。生きると答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服(くっぷく)しないと云う事になる。自分は一言(ひとこと)死ぬと答えた。大將は草の上に突

いていた弓を向うへ抛(な)げて、腰にるした棒のような(けん)をするりとときかけた。それへに靡(なび)いた篝火(かがりび)が横から吹きつけた。自分は右の手を(かえで)のようにいて、掌(たなごころ)を大将の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相である。大将は太いをかちゃりと鞘(さや)にめた。そのでも恋はあった。自分は死ぬ前に一目思う女に逢(あ)いたいと云った。大将は夜がけて(とり)がくまでなら待つと云った。がくまでに女をここへ呼ばなければならない。がいても女が来なければ、自分は逢わずにされてしまう。大将は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁沓(わらぐつ)をみ合わしたまま、草の上で女を待っている。夜はだんだん更(ふ)ける。々篝火が崩(くず)れる音がする。崩れるたびに狼(うろた)えたように(ほのお)が大将になだれかかる。真な眉(まゆ)の下で、大将の眼がぴかぴかと光っている。するとやら来て、新しい枝をたくさん火の中へ抛(な)げ(こ)んで行く。しばらくすると、火がぱちぱちとる。暗(くらやみ)を(はじ)き返(かえ)すような勇ましい音であった。この女は、の(なら)の木に(つな)いである、白いを引き出した。鬣(たてがみ)を三度(な)でて高い背にひらりとびった。鞍(くら)もない(あぶみ)もない裸(はだかうま)であった。く白い足で、太腹(ふとばら)を蹴(け)ると、はいっさんに(か)け出した。かが篝りを(つ)ぎ足(た)したので、くの空が薄明るくえる。はこの明るいものを目(め)が)けての中をんで来る。鼻から火の柱のような息を二本出してんで来る。それでも女はい足でしきりなしにの腹を蹴(け)っている。は蹄(ひづめ)の音が宙でるほど早くんで来る

。女のは吹流しのように(やみ)の中に尾を曳(ひ)いた。それでもまだ篝(かがり)のある所まで来られない。すると真(ま)っくら)な道の傍(はた)で、たちまちこけこっこうというの
声(こゑ)がした。女は身を空(そらざま)に、手に握った手(たづな)をうんと控(ひか)えた。は前足の蹄(ひづめ)をい岩の上に
矢(はし)と刻(きざ)みんだ。こけこっこうと(にわとり)が
また一声(ひとこゑ)いた。女はあっと云って、(し)めた手を
一度に(ゆる)めた。は膝(もろひざ)を折る。った人と共に真
向(まとも)へ前へのめった。岩の下は深い(ふち)であった。
蹄の(あと)はいまだに岩の上に残っている。のく真似(まね)
をしたものは天探女(あまのじゃく)である。この蹄の痕(あ
と)の岩に刻みつけられている、天探女は自分の(かたき)で
ある。 100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细
请访问 www.100test.com